

略歴

1949 静岡県生まれ

主な個展

- 1971 富士見町アトリエ／神奈川
- 1989 ヒノギャラリー／東京(91から2019まで)／東京
- 1999 「さまざまな眼101 中上清展」かわさきIBM市民ギャラリー／神奈川
- 2008 「中上清展 - 絵画から湧く光」神奈川県立近代美術館鎌倉／神奈川
- 2012 「Epiphany」Galerie Richard / パリ、ニューヨーク
- 2014 「中上清展」カサヤの森現代美術館／横須賀
- 2015 ガレリアファイナルテ／名古屋(18)
- 2018 「Light from Afar Recent Work by Kiyoshi Nakagami」LewAllen Galleries／サンタ・フェ
- 「Theophany」Galerie Richard New York／アメリカ～2019
- 2019 「La Beauté Sublime」Art Paris／パリ
- 2020 「Light in Painting」Galerie Richard／ニューヨーク
- ガレリアファイナルテ／名古屋

主なグループ展

- 1972 「Exhibition Bゼミ」横浜市民ギャラリー／神奈川(73)
- 1978 「スクラムの外 現前の距離」神奈川県民ホールギャラリー／神奈川
- 1988 「神奈川アート・アニュアル」神奈川県民ホールギャラリー／神奈川
- 1992 「現代美術への視点 形象のはざまに」東京国立近代美術館／東京、国立国際美術館／大阪
- 1993 「現代絵画の-断面-」日本画を越えて」東京都美術館／東京
- 1995 「今日の日本画 第13回山種美術館賞展」山種美術館／東京
- 1997 「日本現代美術展」国立現代美術館／韓国・ソウル
- 2001 「第10回インドトリエンナーレ」インド・ニューデリー
- 2004 「琳派 RINPA」東京国立近代美術館／東京
- 「Art Cologne」Galerie Richard / ドイツ・ケルン
- 「Art Rotterdam」Galerie Richard / オランダ・ロッテルダム
- 「Art Beijing」ヒノ・ギャラリー／中国・北京
- 2005 「アルス・ノーヴァー-現代美術と工芸のはざまに」東京都現代美術館／東京
- 「St'Art」Galerie Richard / フランス・ストラスブール
- 2006 「日本×画展」横浜美術館／神奈川
- 「Mineral II」Centre artistique de Verderonne / フランス・ヴェルドゥロンヌ
- 2007 「Art Amsterdam」Galerie Richard / オランダ・アムステルダム
- 「Arte Fiera」Galerie Richard / イタリア・ボローニャ
- 2011 「Prolonging Pleasure」Galerie Richard / パリ
- 「Pulse Miami」Galerie Richard / アメリカ・フロリダ州マイアミ
- 2012 「横浜美術館コレクション展 2012年度 第3期 光をめぐる表現」横浜美術館／神奈川
- 2013 「Context Art Miami」Galerie Richard / アメリカ・フロリダ州マイアミ
- 2015 「モダン百花繚乱(大分世界美術館)」大分県立美術館／大分
- 「神々の黄昏」大分県立美術館／大分
- 2016 「琳派降臨 近世・近代・現代の「琳派コード」を巡って」京都市立美術館／京都
- 2019 「Rainer Gross, Kim Young-Hun, Kiyoshi Nakagami」Galerie Richard / パリ

パブリックコレクション

- 東京国立近代美術館／東京
- 神奈川県民ホールギャラリー／神奈川
- 愛知県美術館／愛知
- 神奈川県立近代美術館／神奈川

POST CARD

中上清展 内発一顕現

Kiyoshi Nakagami solo exhibition

2021年1月8日(金)～31日(日)12:00～17:00【水・木曜 休み】協力Galleria Finarte

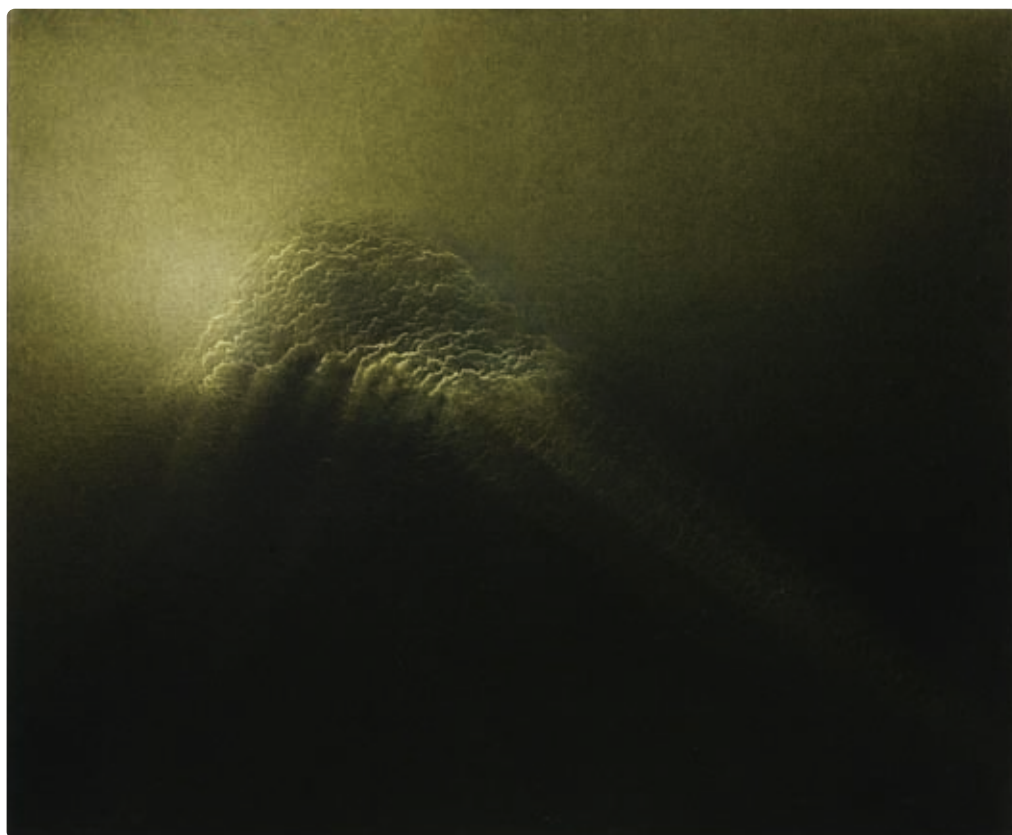
アート
玄 羅
 g e n r a

〒920-0853 金沢市本町2丁目15-1 ボルテ金沢3F
 TEL/FAX 076-255-0988 [ホテル日航金沢横]
 E-mail genraart@ozzio.jp
 Web http://genraart.com



国の新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドラインに沿い、鑑賞環境には十分気をつけてまいります。会期中、時短営業・臨時休業・入廊制限する場合がございます。

2021年が、皆様にとりまして、幾多の困難を乗り越え、幸多き年になることを祈念いたしております。



前から気になっている言葉がある。

ひとつは岸田劉生の「在るてふ事の不思議さよ」(『詩句ある静物』、1918)そして、もうひとつは、ワイトグンシュタインの「世界がいかにあるかが神秘なのではない。世界があるという、その事実が神秘なのだ」(『論理哲学論考』命題6.4.4、1981)である。

ふたつは、今から100年前、同じ時期に書かれたものだ。この両者に、類似以上のもの、あえて同一と呼んでもいいものを、感じ、そして考えて来た。この、「不思議」「神秘」の感覚は対象に向けて言われている様にも聴こえるけれど、実は、それを見ている、感じている、自分がいるという事実に向けて発したものであろう。

ペクトルをそのように換えた時、哲学は言葉を使って、自らの内に語る事の出来るものを見つかるだろうし、絵画は自らの内に生じている現象を表現しようとする筈だ。

では、その時、絵画で、哲学における〈言語〉に代わるものは何であろうか？

〈光〉だ。ものが見える事、形が現れる事、それを追求し表す事が出来るのは、〈光〉であろう。ワイトグンシュタインに倣って言えば「神秘なものが描かれる(見られる)のではない。描かれる(見られる)という事自体が神秘なのだ」。

だから、云いたい事、云うべき事、希望する事は、「不思議」「神秘」の感を湧き上がらせる事、「見る度に、常に新しい空間が見えてくるような絵画」つまり「新しい体験となる絵画」。

そして、すなおな希望を言えば。「見てよかったと思う事ができる絵画」。そんな絵画を光を描くことによって、作りたいたいと思っている。

中上 清